

「学びを支えるファシリテーションの技法」授業及び研修コンテンツの開発

増田謙太郎（東京学芸大学教職大学院）

○ 藤村 祐子（東京学芸大学先端教育人材育成推進機構）

町田 理恵（東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎）

代表者連絡先：masuken@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】ファシリテーション、対話、授業づくり、学級づくり

1 はじめに

令和3年の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～」において、「個別最適な学び」時代の教師の在り方として「ファシリテーション能力」が示されている。学校における学習者である子ども自身が、主体的に学びを深めるためには、教師がファシリテーションの技法を効果的に活用することが必要である。しかしながら、教員養成段階における教師のファシリテーション能力の育成については、いまだ体系的に構築されていない。

本プロジェクトでは、教員養成段階における教師のファシリテーション能力の育成についての体系を構築するとともに、それに基づいた授業コンテンツを開発し、大学、教職大学院での授業や、現職教員研修における適用を目指していく。

2 本プロジェクトの目的

本プロジェクトの背景として、国立大学法人東京学芸大学第4期中期目標・中期計画において、現代的教育課題に自律的・主体的に取り組むことのできる教育者の養成と、小中高連携を進める学校教育改革の動向に対応した複数免許取得の促進のため、令和5年度に学部のカリキュラム改訂を実施することが計画されている。具体的には、現代的教育課題に対する知識の修得と課題解決へ向けた自律性・主体性の育成を目指す「教育創成科目」の学校教育系と教育支援系への共通開設、履修基準の変更の内容としたカリキュラム改訂を実施することとなる。

これに伴い、本プロジェクトでは「教育創成科目」のひとつである「学びを支えるファシリテーションの技法」の授業について、より日本の学校教育の最先端化を先導する科目とするために必要な調査研究をはじめとして、大学における授業開発、さらには他大学でも活用可能な授業コンテンツ作成、さらには広く学校現場の現職教員を対象とした研修コンテンツの作成を視野に入れたプロジェクトとすることが目的である。

学問的知見と実践を結び付けた授業開発のために、プロジェクト担当者間において、「学びを支えるファシリテーションの技法」授業に対応できる授業コンテンツの試案を作成する。その後、各トピックスに精通する国内外の研究者と意見交換を行い、試案をブラッシュアップし、授業等で使用可能なコンテンツを作成する。

なお、上記の取組事項を達成するための手法として、先導的な授業開発を志向することと、プロジェクト期間中の新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を図るため、対面での会議や打ち合わせ等は行わず、全ての取組をオンライン会議やオンラインチャットを活用する。特に、授業コンテンツの作成に当たって

は、オンラインチャットでの交信記録を活用する。

3 本プロジェクトの実施

(1) 授業コンテンツの素案作成について

本プロジェクトの構成メンバーによるディスカッションを経て、全7回の授業のシラバス素案を作成した。各回のテーマに合わせて、トピックスを厳選し、そのトピックスをファシリテーションの技法と対応させる形で整理した(表1)。

表1 授業のシラバス素案

	テーマ	トピックス
第1回	子どもと対話する教師	・対話とは / ・対話的な学びとは / ・「子どもと対話する教師」の阻害要因 / ・マインドセット(イラショナル・ビリーフ、アンラーン、メタ認知) ・対話のワーク:「大好きなもの」「大好きなこと」を語ってください!
第2回	子どもの対話を支える教師	・コンテンツとプロセス / ・心理的安全性 / ・対話に参加することが難しい子どものプロセスにおける事例研究 ・「Belief」の書き換えワーク:「Irrational Belief」を「Rational Belief」に変換する
第3回	学びの持続化を支える教師	・動機づけ / ・ほめる、認める、勇気づける技法 / ・リフレーミング ・「リフレーミング」のワーク:「仕事で大きなミスをしたとき」「仕事に余裕がなくイライラしているとき」
第4回	子どもの思考を支える教師	・発問 / ・ティーチング、ティーチャーとしての教師 / ・コーチング/コーチとしての教師 / ・ファシリテーション、ファシリテーターとしての教師 ・コーチングのワーク
第5回	多様な学びを支える教師	・学びの多様性 / ・子どもの多様性 / ・学習方法や学習内容の多様性 / ・学習評価 ・「目標と評価」のワーク:「こんな評価はいやだ!!」「こんな評価にした!!」
第6回	ファシリテーションの技法を応用した授業づくり	・授業の基本形(導入・展開・まとめ) / ・ファシリテーションの基本形(問い・発散・収束・振り返り) / ・ファシリテーションの様々な技法(グラドルルール、流れを示す、場の設定) / ・ワールドカフェ、フィッシュボール ・発散と収束のワーク:結婚の条件
第7回	ファシリテーションの技法を応用した学級づくり	・アイスブレイク / ・「学級目標」を決める活動 / ・チームワーキング / ・合意形成 ・学級活動プランをデザインするワーク:アクティビティを見極めよう

(2) 学外の研究者との意見交換

授業コンテンツは、他大学への提供や、現職教員研修等への活用も見据えている。そのためテーマやトピックスに精通する学外の研究者(帝京大学 町支大祐先生)と意見交換を行った。

そこでは、「教師のあり方を根本から考えていくことが重要となる」「学習者中心の学びを自分自身が体験することからはじめるとよい」「ファシリテーションを理解することが目的になっている感じがするが、できるようになることをどこまで目指すのか、できるようにするためには、自分自身が体験することが重要となる」との指摘をいただいた。

この意見交換を踏まえて、授業の試行及び今後のプロジェクトの方向性として、次の2点について重点を置くことにした。

1点目は、本授業の主たる目的を「教師の在り方についての変容を目指す」点に置くことである。これを検証するための具体的な方策として、授業のリフレクションにおいて、「授業前の状態よりも『ファシリテーターとしての教師』になるための心構えや態度が形成された」かどうかを確認することが必要であると考えられる。

2点目は、「リフレクションを深めるための問い」の作成である。本授業は対面型及び動画でのオンデマンド視聴を想定しているため、どちらの学び方でも「問い」を個人やグループで深めていけるような授業

コンテンツの開発を目指すことにする。具体的には、「問い」について、より学生（受講者）同士が対話的に考えていけるように、アニメーション動画を作成することにする。

（３）授業素案の試行について

１年目の取組

授業の素案を基に、令和４年度に教職大学院高度選択科目「教育ファシリテーターの育成」（対面・リアルタイムでのオンライン併用型授業）にて試行を行った。授業のリフレクションシートでは、毎回、前述の「授業前の状態よりも『ファシリテーターとしての教師』になるための心構えや態度が形成された」について、「かなりそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「そう思わない」の５件法でたずねた。全７回の授業において、どの授業回においても「かなりそう思う」「ややそう思う」が９割以上を占めており、受講生のファシリテーターとしての教師の心構えや態度の形成についてはおおむね達成できていることが確認された（図１）。

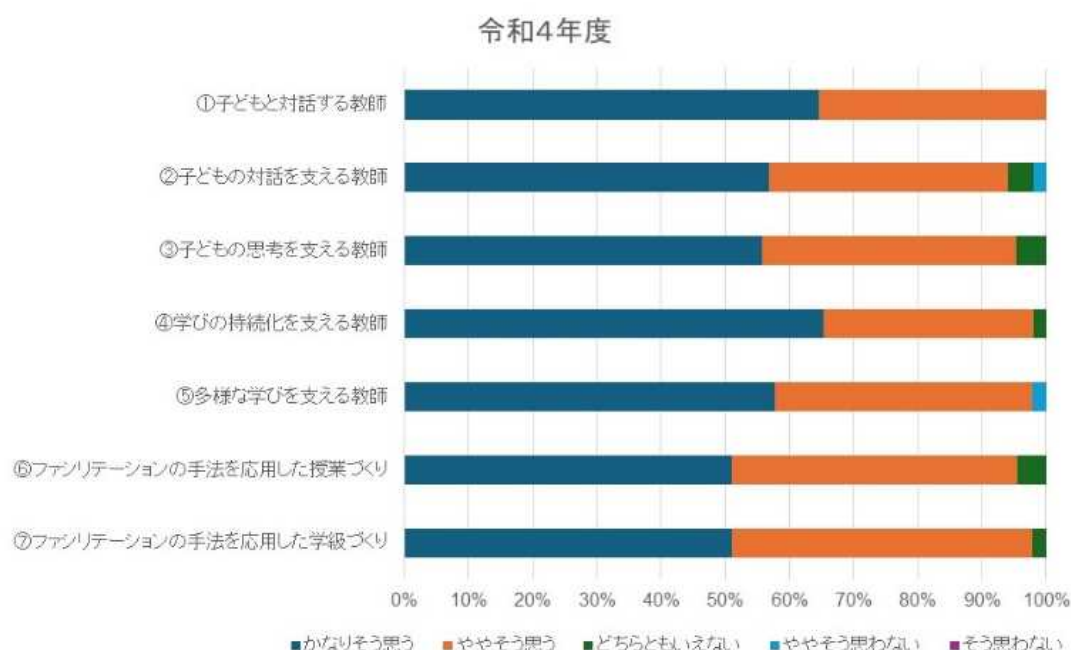


図１ 令和４年度の授業リフレクション（ファシリテーターとしての教師の心構えや態度）結果

２年目の取組

２年目となる令和５年度においては、１年目の成果と課題を基に、対面型とオンデマンド型の双方で使うことができる授業コンテンツを開発することを目標とした。これにより、他大学での授業や、さらには広く学校現場の現職教員を対象とした研修コンテンツにも活用できるようになることが期待される。

具体的な取組としては、授業におけるグループワークの場面の工夫である。対面型やリアルタイムのオンライン型授業ではグループワークを行うことは容易だが、オンデマンド型でグループワークを行うことはなかなか難しい。そこで、アニメーション動画を活用することを考えた。オンデマンド教材の動画中に、学生がバーチャルで対話を行っている場面をアニメーションで示し、その対話の様子を見たとうえで、学生は自分の意見を文章で入力するようにした（図２）。

この動画を用いて、令和5年度も教職大学院高度選択科目「教育ファシリテーターの育成」(対面型)にて再度、試行を行った。このアニメーション動画を対面型授業でも問題なく使用できるかどうかを確認し、令和4年度と同様に「授業前の状態よりも『ファシリテーターとしての教師』になるための心構えや態度が形成された」の項目での効果検証を行った。

結果として、概ね令和4年度と大きく変わらないことが確認された。すなわち、動画コンテンツによる対面授業への影響は少ないものと考えられる(図3)。



図2 アニメーション動画の一例

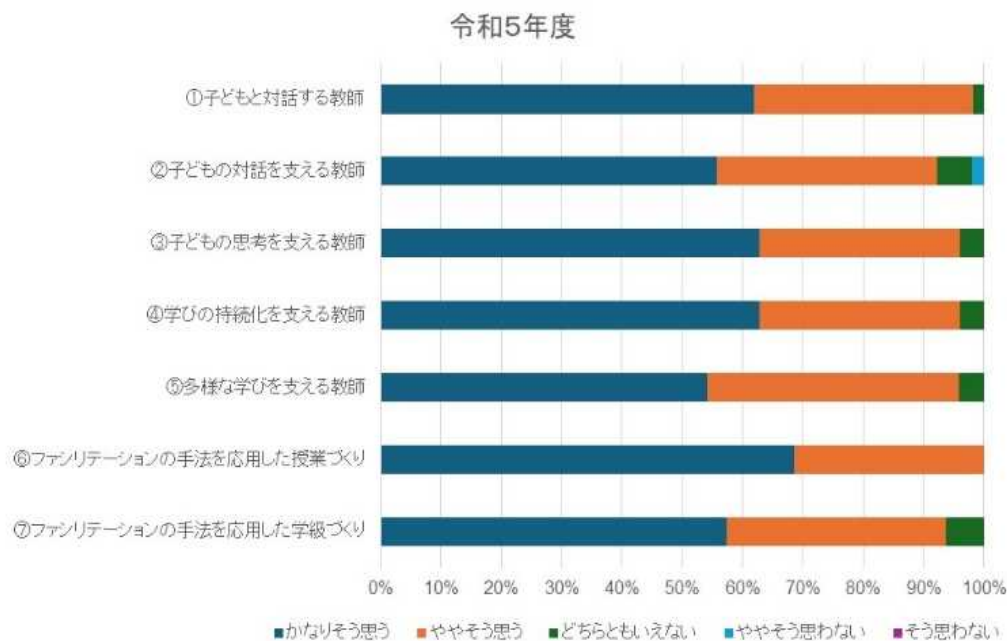


図3 令和5年度の授業リフレクション(ファシリテーターとしての教師の心構えや態度)結果

4 課題(又は成果, 提言, 提案等)

2年間にわたるプロジェクトにより、対面型とオンデマンド型の両方で活用できる授業コンテンツの作成を行うことができた。この成果物を基に、令和6年度は学部3年生を対象とした授業(対面型)を試行することにする。

令和7年度より、学部3年生全員を対象とした「学びを支えるファシリテーションの技法」の授業(対面型・オンデマンド型併用)を新カリキュラム科目の教育創成科目として開講する予定である。また、他大学への提供や、現職教員研修への活用も行っていく。